

## お花の形のお墓、お花がレリーフされたお墓

第10回では埼玉県戸田市の松井 信之さん（当時38歳）が入賞した。

石はマホガニー、他にないお墓を作りたいと思い、石材店の方といろいろ話し合いました。はじめは彫刻を石塔だけという話から、どんどん広がり全面にということになり、せっかく彫るのなら浮かし彫りができないかということになりました。『てっせん』の花をつるのようにしていただきました。機械では彫れないということで、手加工で細部まで仕上げていただきました。



第12回では宮城県石巻市の藤井 敏雄さん（当時60歳）が特別賞で入賞した。

蓮の葉型お墓は石でできた蓮池に浮かぶように設置され、中央には水晶でできた大きな雫が一滴（苗字入り）、献花台は蓮の実を形どっている。泥中より咲き出でて、清浄無垢な大輪の花を咲かせる蓮は、古くから極楽浄土の花とされる。汚れた俗世にいても、心は汚れ染まることのない純粋な生き方を象徴する。このような極楽浄土の花の下で永遠の眠りにつけるとは、なんと幸せだろうと思う。全体的に落ち着いた雰囲気をかもし出す。



第15回で入賞の埼玉県越谷市の高島 治夫さん（当時37歳）は、永遠に花に包まれるイメージ、彫刻の花いっぱい型お墓。

私の最愛の母が突然、他界致しました。母の面影、仕草、笑い声、愛情、思いやり、優しさ、一日たりとも忘れた事はありません。母は生前、お花や植物が本当に大好きな人でした。自宅の庭一面に多くの花々を育て、季節ごとにその実を見事に咲かせておりました。年に一度の母の日と誕生日には、母の大好きな花をプレゼントするのが恒例となっており、その際の照れながら、嬉しそうに微笑む顔は、良き思い出です。何が起こっても、私の記憶から消え去る事はありません。今までも、そして、これからも……



時の流れというものは実に早いもので、後、数ヶ月で母との死別から一年を迎え

る状況に至りました。「一回忌に納骨をしよう」そう固く決意しておりました。そこで初めてお墓建立に着手したのです。霊園は、母が生前過ごした地、慣れ親しみ思い出の詰まった地、埼玉県三郷市にある『新三郷シティメモリアル』と決めていました。時代の風潮、宗教等にとられる事無く、純粹に良い墓、納得の行くお墓を建てたいと心から思いました。石の種類、デザイン、文字、彫刻、全てにこだわりました。ひとつも妥協したくなかった。石材店には出来る限り多くの花の彫刻を入れ、永遠に、永遠に花に包まれる、そんなお墓をイメージしました。母は優しく、人として優れておりました。だからこそ、お墓に刻んだ一文字は「優」に致しました。

第16回で入賞した宮城県仙台市青葉区の奥村 弘子さん（当時69歳）のお墓は、棘のない白いバラの花入りお墓。墓石を刻んで頂いてから9ヶ月の月日が経ちました。私達の思いをそのまま表現して頂き、皆でとても気に入り、お墓参りに行く度に感謝しております。

難病で10年間の闘病を経て天に帰って行った主人。明るく美しい所で過ごして欲しいと願い赤のインド御影石と桜色、そして娘の旦那様のたつての希望である、棘のない白いバラの花を彫刻。また主人の優しさを想って下さった「優」の字の提案を入れ、美しく出来上りました。そして主人の大好きだった小鳥を想い、石材店にアドバイスを頂きながら、平和を願い白い鳩を彫って頂きました。

これからも私達が皆で、光降り注ぐお墓を、大切に愛情をもって守って行きたいと思えます。

第17回では北海道札幌市豊平区の泉 光男さんのお墓が特別賞に入賞した。石材とガラスの異素材を組み合わせたお墓。48歳で亡くなった娘さんのために家族や親戚と相談して建てた。石の基礎の上に、虹のようなガラス製の半円形オブジェが3つ重なっている。ガラスは2枚あわせて、張り合わせた中には小さなピンクの桜の花びらが散りばめられている。





第20回では宮城県石巻市の橋口 咲子さん（当時65歳）が入賞した。東日本大震災で被災した宮橋口さんは、亡夫が好きだった胡蝶蘭を馬蹄形にして墓石に刻んだ。震災で寿司店も家もすべて失い、再起をかけての貸店舗での営業再開。ところが無情にもご主人が発病、帰らぬ人となる。現役で50年仕事をし、老舗と言われる店作りを目指した夢ははかなく潰えた。馬と胡蝶蘭が好きだった亡夫への鎮魂の

碑である。

第20回では宮城県仙台市太白区の菅原 秀子さん（当時71歳）が入賞した。絵手紙が趣味であったご主人のコピーの中から、クロッカスの花と「春をみつけて 心がはずむ」という文章を影彫りした。お墓に行くといつも優しい主人の思い出に会えるような、心落ち着くお墓になりましたと語る。



第21回ではご主人が書いた<游雲>の文字と奥様が描いた<椿の花>で、群馬県高崎市の森 健郎さん（当時60歳代）が入賞した。



私と妻。二人で協力して共に歩んで来た道のり。 家庭を持ち子どもを育て、

親の面倒を見てきた。生まれたばかりの我が子が与えてくれる小さな喜びから悲しみや悩みも 大小さまざま。その時々話し合っ解決をし、時にケンカもした。振り返ってみると楽しくもあり苦しくもあり、嬉しくもあり。そして今、共に生きてこられた幸せをかみしめている。だから<游雲>。あの世ではゆったりと過ごしたい。おおらかに日々を楽しみたい。もちろん妻とふたりで。<椿の花>のように鮮やかに潔く。私書いた<游雲>と妻が描いた<椿の花>をやさしい色あいの墓石に 彫り込んで頂きました。墓所入口左右には二人で並んで腰が掛けられるように、平らで広めの石を設置しました。夫婦揃ってお参りに来た時はこの石に並んで座り、亡き父母と語り合いたい。時には思い出にも浸りたい。この空間は私達夫婦にとってなんとも豊かな 空間となりました。

第 21 回では宮城県名取市の相澤 眞由美さんが入賞した。



母は秋の季節がとても好きでした。秋に咲くコスモスの花を見ると心穏やかになり、又、嬉しい気持ちになるからでした。私たち家族も秋の季節がとても好きでした。コスモスを見て穏やかに微笑む母、お地蔵さんのように優しい母が大好きでした。天国にいる母のために、大好きだった母のために 私たちには何がしてあげられるだろう。大好きだった母の為に、母が大好きだったコスモスを心を込めて描きました。私が描いたコスモスをお墓に使用して頂くことで、母と子の繋がりが永遠に続いていきますように、という思いからこのお墓を作りました